

「東山魁夷 ～日本人に愛された画家、その生涯～」

画家・東山魁夷 と名前を聴いて、すぐにピンとこなくても、きっと彼が描いた作品を見れば、誰しも「ああ、あの絵を描いた画家ね! 」とわかるのではないのでしょうか?

日本画壇の第一人者と言われる東山魁夷ですが、彼が描く絵は、いわゆる日本画とも西洋画ともそのカテゴリーを超越し、また、国を超え人種を越え、私たちに深い共鳴と共感を与え続けています。

それは、なぜなのでしょう? 彼の生涯から紐解いていきたいと思います。

東山魁夷は、明治41年、3人兄弟の次男として横浜に生まれます。父親は商社の横浜支店長をしており裕福な家庭でしたが、魁夷が3歳の頃に会社を辞め神戸に引っ越しそこで小さな会社をはじめ、魁夷は、その神戸で青年時代を過ごすことになりました。

その頃から両親の仲は良くなく、繊細な感受性を持つ魁夷は、自身の心を守るために、一人絵を描くことに没頭し、その頃から魁夷の心に終生宿ることになる暗闇が出来ていったと言います。

15歳の時に、油絵の具を買ってもらい自己流で自画像を描いています。その自画像は、純粹で実直な魁夷そのものです。そのときに魁夷は、「どんな苦難の道でも、画家が私の辿るべき道だ。と考えるようになった。」そうです。

画家になることを父親に告げると、最初は猛反対を受けますが、「日本画だったら」という条件付きで許しを得ることが出来、魁夷の日本画家としての道が開かれました。

18歳で、東京芸術大学に合格しますが、そこから魁夷の人生には様々な不幸が降りかかります。

父親の会社が傾き、兄が結核で命を落とします。仕送りを断り自分で稼ぎながら勉強を続け、絵の勉強をするためにドイツ留学をします。ですが父親が倒れたため留学を切り上げて日本へ帰国をします。

その後は、父が莫大な借金を残して他界、弟も結核で、母も脳溢血で亡くなります。

ようやく借金を返済した頃、太平洋戦争が始まり魁夷も招集され、明日の命をもしれず厳しい訓練を余儀なくされました。

そして1946年の冬、魁夷は千葉県の鹿野山の山頂で、山並みに沈みゆく夕日を眺めていましたが、そのときに、かつて敗戦の直前、死を覚悟した日に見た生の輝きそのものを感じた風景を思い出し、自己も自然もともに無常の中に生きる一体のものであると実感するに至ります。

それが、風景への眼が開かれた瞬間でした。

そして、《残照》が、この体験から生まれます。当時魁夷37歳、その作品は日本政府の買い上げとなり、やっと画家として認められた第一歩となりました。

「私は生かされている。生かされているという宿命の中で、せいっぱい生きたいと思っている。」

自分の宿命を「諦める」というただ消極的な意味にせず、“全てを受け入れ、生かされた生を生き抜く”と言う積極的な意味と捉え、画家としての地位を決定的なものとした《道》を生み出しました。

魁夷は、「画を描くということは、祈ることである」と言っています。幼少の頃から、複雑な家庭で育ちかつ繊細だった魁夷は、自身の心を守るために、描くことを始め、芸術の世界に入ってから、その多難な将来を予感し、精神的な強い支えを求め、厳しい山国の風景は、そのような魁夷の心と精神を導く大きな要素となったと言います。

魁夷は、「東山ブルー」と言われる静謐な深いグラデーシヨンの青を用いて、人物が一切出てこない風景画を多く描いていますが、その画には、しんと静かなたたず

まいの中に、スピリチュアルのようなものを感じることがあります。これはその祈りの象徴なのかもしれません。

57歳になると、魁夷の画業は、高い評価を得て、皇居の壁画制作、唐招提寺壁画制作など、数々の大きな仕事を任され、特に、約10年を掛けた唐招提寺壁画制作は魁夷の集大成となります。

その後、91歳で、老衰で亡くなるまで絵を描き続けていた魁夷ですが、《夕星（ゆうぼし）》という作品は、一度完成させサインを入れたものの、サインを消し、また描き続けており、これまでのブルーとは違った青が使われていたり、構図もこれまでのものと違うことから、これが最後の作品になるとわかっていたのではないかと。そして、この《夕星》に描かれた4つの背丈の違う木は、魁夷の両親と兄、弟、そして空に輝く一つの星が、魁夷自身なのではないかとされています。

魁夷は、「成功」と言われるものを手にした後も、それらを喜んでくれるに違いのない近しい人たちがいないという孤独を最期まで抱えながらも尚、それらをただ悲観するのではなく、「全てを受け入れ、生かされた生を生き抜く」という静かな祈りと信念のもとに、それを表現しつづけた画家でありました。

原稿執筆と音声 : FOM日本語ガイドグループ 澤田洋子